

全日本リコ研だより 第8号

令和4年2月18日発行 JRS編集人 小山内 仁



コロナ禍での音楽の必要性

全日本リコーダー教育研究会
会長 後藤 俊哉

日頃より全日本リコーダー教育研究会へのご理解・ご支援を賜りまして心より感謝申し上げます。これまで、本教育研究会の向上発展のために各地区で行ってきました全国リコーダー教育研究大会ですが、今年度は、コロナ禍にもかかわらず、横浜市立義務教育学校 西金沢学園の教職員の皆様のご理解・ご協力をいただき、第45回全国研究大会が延期の上、開催できたことに感謝申し上げます。第46回全国研究大会は、令和4年11月22日に北海道北見市で開催予定です。

未だ感染状況が改善しない中、第43回全日本リコーダーコンテストは、令和4年3月27日に全団体録音審査(無観客)で開催することとしました。

このように、この2年余りの間コロナ禍で、音楽表現を制限されました。リコーダーも大きな影響を受けました。演奏すること、歌うことを制限された中、当たり前になっていたことへの価値が感じられたかと思います。特に音楽が「人と人をつなぐもの」として「豊かな心を育むかけがえのないもの」として深く心に刻むことができました。

この「人と人をつなぐもの」として、聖心女子大学の今川恭子教授編著『私たちに音楽がある理由(わけ)』(音楽之友社2020年)の「音楽授業におけるコミュニケーションの様相」の中で、リコーダーの導入場面が取り上げられています。少々長いのですが紹介します。

【事例1:リコーダーの息遣いへの気づき】

この事例は、小学校3年生を対象とした音楽授業でのリコーダーの導入場面である。この日、初めてリコーダーを手にした子どもたちは、嬉しそうな様子で授業に臨んでいる。そして、リコーダーの頭部管のみを使って息を吹き込み、音を出すことを試す中で、息遣いを調整することによって、他者とピッチが合うことを発見した。

リコーダーを分解し、頭部管のみをもっている子どもたち。T教諭が「優しく息を送ってみよう」というと、児童Eは、頭部管の吹き込み口に口をつけ、口を膨らませながら息を送った。すると「ピーッ」と大きな音が鳴ってしまい、隣の児童Nが児童Eの方を向いて両耳をふさぎ、不愉快な表現をする。それを見て児童Eは慌てて音を止める。児童Nは、児童Eに口をすばめて静かに息を送り、「ふー(息を吐きながら)でしょ」と伝える。その後、児童Eは優しく息を送るようになった。それに続いて児童Nも音を出す。するとまたまたピッチが揃ったのか、ビリビリとした振動が起こり、児童Eは、リコーダーを口から話して、「なんか耳がかゆくなったね」と児童Nに向かって同意を求めるよう言う。児童Nは、「ね、みょーんってした。面白い」と言って笑ってる。(略)

ピッチが合うという感覚の面白さを発見した子どもたちは再度、その感覚を再現するために、音に対する省察を言語化しながら試行を繰り返し、ぴったり合う感覚を探していった。(略)

このように、音楽授業における子どもたちのコミュニケーションは、自分の感覚を他者と共有するために、質感やニュアンスを伴った発話が生じられたり、言語の代わりとなるような身振りが用いられたり、言語と身振りを共起させたりと、マルチモーダルに生起しているといえる。このような音楽室の中での学習は、子どもたち同士のやりとりの中で、協働的に学習内容を発見したり、解釈したりすることを通して実践される。そうしたコミュニケーション・相互行為の過程自体が学習の営みとして捉えられるだろう。

このように、リコーダーと初めての出会いの中でもコミュニケーションの場面が見られること、それを見取る指導者の目の必要性を感じました。今求められている「主体的・対話的で深い学び」そのものです。子どもたちの学びから、大人も

学ぶべきことが多いと実感しました。今後とも本教育研究会へご理解・ご協力をお願い致しますとともに、各都道府県のリコーダー教育研究会のますますのご発展を祈念します。

第42回 全日本リコーダーコンテスト 審査員寸評



第42回全日本リコーダー コンテスト審査を終えて (非公開による録音審査)

審査委員長
リコーダー奏者 田中 せい子

第42回全日本リコーダーコンテストに出場された皆様、本年も素晴らしい演奏をありがとうございました。今回、皆様の生演奏を聴くことは叶いませんでしたが、ヘッドフォン越しにも例年に劣らない緊張感、集中力をひしひしと感じながら全ての演奏を堪能させていただきました。また、演奏指導のみならず今回は録音作業も行わなくてはならず指導者の方達にとってはかなりなご負担と手間が生じたことと思いますが、録音は概ねとても質が高く、指導される方の能力の高さが数々の質の高い演奏につながっていることを痛感致しました。さらに、本年のコンテストを中止とせず、異なる形での開催に向け、リコーダー教育研究会の先生方は大変なご苦勞をされたことと思います。生演奏なしにもほぼ例年と変わらないコンディションで審査をさせていただくことができたのは驚くべきことでした。先生方の並々ならぬ熱意と連携の素晴らしさに心より敬意を表したいと思います。

もちろん来年度は通常の形でコンテストを開催できるよう願っておりますが、もし再度録音での審査という形になった場合は、音源を準備される際に確認されるとよいと思ったことが2点あります：

- 1)演奏会場は響きのよい場所が適していると思いますが、あまり響きすぎると細部が聞こえなくなってしまうので、録音時に内声の細かい動きまで聴き取ることができるか確認すること。(マイクの設置位置によっても大分変わると思います。)

- 2)各声部がバランス良く聞こえているか注意して、聴き取りにくい声部があればマイクの近くで演奏するなど、特に大人数の場合は各楽器の配置にこだわり、数種類試してみて最良のものを選ぶこと。

今年の合奏部門、独奏・重奏部門で特に印象に残ったのは「十二幻夢曲」を演奏した帯広市立広陽小学校と「ティス・トリプル」を演奏した鈴鹿市立桜島小学校です。どちらも音の響かせ方が秀逸でした。息が自然に自由に流れているので音に硬さがなく、各パートの音もよく調和してしっかりとした響きを作り出していました。

私が選考の際にいつも最も重視していることは、各奏者、各グループがどれだけ楽器を響かせることに成功しているか、という点です。まず最初の音が出た時によく楽器が鳴っていると、それだけで「ありがとう!」と言いたくなります。リコーダーは誰にでも音が出せるけれど、音の芯を捉えて響かせることは大変難しい楽器です。息の量、スピード、息圧の良いバランスが揃っていないとキンキンした音になったり、ぼーっとした音になったり、音が裏返ったりしてしまいます。響く音を作るためには、しっかりと息を流すけれども、喉で押し肩、肘、手首などを固めないことが大切です。体の力みを抜き、余計な圧がかからない息を楽器に送ることで楽器の響きは増し、他の管楽器にも引けを取らないリコーダー特有の音色の美しさを引き出すことができるのです。そのためには楽器を無理なく楽に持てているか、呼吸に苦しさはないかなど、演奏中に何らかのやりにくさがないかを確認し、あればそれを改善していくことが必要です。

本年の参加者の方々も技術的には本当に申し分ない方たちばかりです。あとはどこまで音色を高められるか、日々の練習の中で、上述したような体のあり方が音に大きく影響するということを知っただけでも変わってくることがあると思います。



全日本リコーダーコンテストに 寄せて

文部科学省教科調査官
志 民 一 成

第42回全日本リコーダーコンテストでは、ホールに集まったコンテストの開催が叶わず、録音を聴いて審査をさせていただきました。新型コロナウイルス感染症の拡大によって、これまでのように十分に練習を重ねることも難しかったのではないのでしょうか。そのような状況の中で、様々な工夫をしながら練習の機会をつくり、その成果として素晴らしい演奏をご披露くださった出場者の皆様に、心からお礼申し上げたいと思い

ます。また、このように出場者の皆さんが日頃の研鑽の成果を発表する場を設けてくださいました、全日本リコーダー教育研究会の関係者の皆様に、深く感謝申し上げます。

今回、録音での審査ということになりましたが、演奏の録音に不慣れな方は、どのように録音したらよいかわど悩まれたのではないのでしょうか。また、自分たちの演奏を録音して客観的に聴くことによって、自分たちの演奏がイメージしていたものと異なることに戸惑いを覚えた方もいらっしゃるかもしれません。録音する場の空間、マイクの位置、録音機の設定などによって、演奏の印象は大きく異なります。今回聴かせていただいた録音の中には、マイクの位置が原因でパートのバランスが悪く聞こえたり、録音する場の環境(特に残響)にマッチしないアーティキュレーションになってしまったりしているのではない

かと思われる演奏もありました。ホール等で生演奏をする際にも、こういったことへの配慮は不可欠ですが、録音の場合、これらのことがシビアに伝わってしまいます。

今回、録音での審査となったことで、むしろそういった課題を点検し、改善するよい機会だと思っていただくとよいと思います。録音を生かすことで、演奏する環境に合わせた最善の

アーティキュレーションやバランスは、どうしたらよいかといったようなことについて、聴く人の立場になって検証し、さらに演奏を工夫してみてください。

最後になりましたが、全日本リコーダー教育研究会をはじめ、関係の皆様のご尽力に敬意を表しますとともに、本コンテストのますますのご発展をご祈念申し上げます。



「音色づくりの面白さ」

文部科学省教科調査官

河合 紳和

私は、今回初めてこのコンクールの審査に携わらせていただきました。長期化するコロナ禍の影響で、録音による審査となり、素敵な演奏を生で聴くことができず大変残念でしたが、皆さんが真剣な表情と柔らかな心で音楽を奏でる姿を想像しながら審査をさせていただきました。

リコーダーは、ピッチの正確さを保ちながら強弱の変化をつけることが大変難しく、表情豊かに演奏することに苦勞する楽器であると認識していたため、審査に当たっては音色やアーティキュレーションの工夫に着目しながら演奏を聴かせていただきました。私が審査を担当させていただいた合奏部門で特に優れていると感じた団体の演奏では、旋律やフレーズの曲想に合わせてタンギングの堅さ(柔らかさ)を調整し、アーティキュレーションの変化を明確に表現していたことが印象に残っています。とくにタンギングの微妙な調整によって、

その旋律がどのように歌われるのか、フレーズがどのように流れていくのかが、出だしの音色から見えてくるのを感じました。とくに細かいリズムの箇所では、タンギングが雑になってしまいがちですが、裏を返せば、その課題を克服することによって演奏の仕上がりが格段に向上するということを意味しているのではないかと思います。

このことは、アーティキュレーションの工夫とも関連性があります。例えば、同じ「スタッカート」でも、タンギングの調整によって、鋭いスタッカート、重いスタッカート、柔らかなスタッカート、軽快なスタッカートなど様々な表情が生まれます。運指の複雑なパッセージを滑らかに吹きこなす達成感もさることながら、こうした音色づくりを通して音楽に表情を与えていくことの中にもリコーダーを演奏する面白さがあるのではないのでしょうか。

皆さんの演奏を聴かせていただいて、私自身、リコーダー音楽の豊かさや奥深さを再発見することができました。素敵な演奏に心より感謝いたします。そして、今後も皆さんがリコーダーという楽器を通して、音楽の素晴らしさや演奏することの喜びを体感していけることに期待いたします。次回のコンクールでは、是非とも会場でお会いできますことを祈念いたします。



時空を超えたつながりを実感

国立音楽大学教授

津田 正之

第42回の全日本リコーダーコンテストでは、小学校の部と一般の部の独奏、重奏、合奏を審査させていただきました。

小学校の部の演奏では、どの演奏も、伸びやかな音色、美しいハーモニーで奏でられていました。子供たちの今後の成長がとても楽しみです。一方、一般の部の演奏では、定番の名曲から現代音楽的な手法を駆使した作品まで幅広い作品が取り上げられ、曲にふさわしい表現方法がよく吟味されていました。小学校及び一般の部の全ての団体等が、それぞれ曲のもち味を十分に生かした演奏を実現していました。すばらしい演奏を発表された出演者並びに指導者の皆様に、心から敬意を表する次第です。

今回は、各団体等によって録音された音源をもとに審査が

行われましたが、録音状態については様々でした。これまで積み重ねてきた成果をよい音で共有できるよう、指導者が録音環境を整える必要性を感じました。また、録音された音源は、ホールでの生演奏よりも残響が少ないために、音程のズレや小さなミスが、生演奏よりもやや目立ちやすいことも特徴です。ホールの演奏でも録音でも取り組むべきことは基本的に同じですが、自他の音をよく聴き、他者との関わりから自己を調整し、音楽の縦と横との関係について、「心」「技」ともに合わせていくことを、一層心がけてください。

さて、北は北海道、南は沖縄まで、様々な地域のリコーダーを愛する皆様の演奏を聴かせていただき、リアルタイムではありませんが、時空を超えたつながりを感じることができました。コロナ禍の状況は、著作権に留意しながら、オンラインによる配信も重要な表現の場になることを示唆しています。例えば、全日本リコーダー教育研究会相談役の吉澤実先生は、ご自身と仲間による演奏をオンラインで配信されています。

皆様の演奏を全国の皆さんに配信していただき、そのよさを共有し合うことによって、リコーダーを愛する人たちの心が

時空を超えてつながることでしょう。皆様が、子供たちや仲間とともに、さらにすてきな演奏を実現していくことを心から

ご期待申し上げます。



「音のみだからこそ」

横浜国立大学非常勤講師
リコーダー奏者

川 端 り さ

今年は中・高・大学生の「重奏の部」「合奏の部」「独奏の部」の審査をさせていただきました。審査員が集っての録音審査という形で、聴く側の環境は同じですが、録音された環境が違いますので、その違いを超えて皆さんの音色や息使い、表情を聴きとることに集中しました。

感銘を受けた演奏の一つは、北海道函館市旭岡中学校の「日本民謡メドレー」の演奏です。メドレーの中の各民謡がとても生き生きと演奏されていて説得力がありました。一人一人の曲に対するイメージが一致していると感じました。皆で同じ表情を作り出すことができていてと同時に音程の良さがその表情に説得力を加えていました。

もう一つは、沖縄県栗国村立栗国中学校の「デュオソナタ1番」の演奏です。音色がとても綺麗なだけでなく、音程も大変よく取れていました。ハイドンの明るく楽しい表情が生き生きと

表現できていました。

今まで演奏しながら自然にしていた動きや顔の表情などは録音審査では一切伝わりません。生の演奏では音だけではなく自然に湧き上がるそのような表情も含めて作品をプレゼンテーションできるわけですから、録音はとても限られていると言えます。しかし、音のみという限られた条件だからこそ、リコーダーの表現力について改めて考える絶好の機会なのではないかと思います。普段演奏しながら聴いているタンギングと、録音して客観的に聴いたタンギングに違いがありますか？どのようなタンギング・シラブルを使えば、よりやりたい表情を出せますか？タンギング・シラブルだけではなく、アーティキュレーション、息使い、音色、タイミングにおいても、自分のやりたいことが明確にできていますか？是非一人一人がそのことを自分に問いかけて、より自分が納得でき、また相手に伝わる説得力のある演奏を目指していただければと思います。

コロナ禍で部活動が制限されていた中、感染対策をしながら一生懸命練習した生徒の皆さん、社会人の皆さん、また指導された先生方に心から敬意を表します。皆さんの深い情熱が込められた素晴らしい演奏を聴いたことを大変光栄に思います。



第42回全日本リコーダー コンテスト審査を終えて

上野学園大学講師
リコーダー奏者

太 田 光 子

今回は小学生の部、一般の部の審査を担当いたしました。新型コロナウイルス感染症の影響により全て録音審査となりましたが、全国から集まってきた皆さまのリコーダーの音を今年も聴くことができ、心から嬉しく思いました。その中から特に印象深かった団体を感想とともに挙げてまいります。

小学校の部《独奏の部》「忠実な羊飼いやリ、ソナタ第6番」を演奏した、北海道・北広島エアリードット。音色の美しさと確かなテクニックは群を抜いています。第1楽章最後のアダージョ部分及び第4楽章でつけた装飾音符も見事でした。

小学生の部《重奏の部》では、「フランス古舞踏のスタイルによる7つのタブローより」を演奏した、北海道・帯広市立広陽小学校。音程もよく完成度の高いアンサンブルが印象的でした。『ティステイ トライフル』を演奏した三重県鈴鹿市立桜島小学校。何と言ってもワクワクさせられる“ノリ”の良さに脱帽です！各パートの輪郭がはっきり聴こえ、まとまりのある鮮やかな演奏でした。

小学生の部《合奏の部》では、「イントラダ・ソング・ダンス」を演奏した新潟県・十日町市立馬場小学校。生き生きとした躍動感のある演奏がすばらしい！低音のメロディのたっぷりとした歌いっぷりも魅力的、セクションごとの音楽的なコントラストも明確で、録音であっても目の前で演奏しているかのような臨場感のある音楽を繰り広げていました。

一般の部《独奏の部》では、クレマーの「華麗なる変奏曲」op.18を演奏した大阪府の川口紗承さん。テーマでの素直かつ洗練された演奏に好感が持てました。第5変奏アダージョでの悲し気な表情から最終ヴァリエーションへ移り変わる際の華やかな表現がとても良かったです。16分音符ズラリと並ぶヴァリエーションでの見事なテクニックも「華麗なる変奏曲」のタイトルにふさわしいものでした。

一般の部《合奏の部》では、「コーリッシュス クインテット」を演奏した、東京都・ぶらむリコーダーアンサンブル。音のカラーが曲の様々なシーンに合わせ変化し続け、ある時はたっぷり歌い、飛び跳ね、躍動感に溢れた好演でした。フレスコバルディの「スバニョレッタ上のカプリチオ」を演奏した三重県のバードファンタジー。内声も埋もれず曲の要となるモチーフが各パートからしっかりと聴こえる、秀逸な音楽づくりでした。「アフリカ組曲第17番」を演奏した、北海道RECつべつ。重厚感のあるサウンドで軽やかなリズムを刻み、生き生きとした音楽

を奏でていました。

この場には書ききれませんが、他にもすばらしい演奏に多く出会ったことを、申し添えておきます。参加者の皆さま、ご出場おめでとうございます!これからもこの調子で、ステキな演奏をし続けていってくださいね。

そして、コンテストに関わる先生方のご尽力、そして指導

されている先生方の熱意に、感服しております。子供たちがこのような貴重な経験を機に、これからもリコーダーを吹き続けて、ステキな音楽といつも一緒にいる大人に育っていったほしい、と心から思います。

さて、また来年はどんなすばらしい演奏に出会えるでしょうか?今からとても楽しみにしております。



僕達は「良い音」「良い音楽」を聴きたい。
いや、聴き取りたいのかもしれない。

桐朋学園大学古楽科非常勤講師
リコーダー奏者 古橋 潤一

去年から続くコロナ禍の中で、今年もリコーダーコンテストを開催するということは、どれだけ大変なことだったのか。自分には想像もつきません。全日本リコーダー教育研究会の皆さんと、コンテストに応募してくださった皆さんに心から感謝申し上げたいと思います。

さて、このコロナウィルスの影響で、自分たちも演奏の機会を失い、コンサートを開催できても聴衆の人数制限を受ける。こんなことになると誰が予想したでしょう。コンテストの審査に行って、そこに演奏している皆さんの姿を見ることができないなんて…

そこで流行りの(?)リモートでのコンテストの開催となったのです。録音を聴いて審査する。うん、それはもしかしたら僕達にとって逆に難しいことではないのかもしれませんが。ただし、それはある程度のレベルをクリアした録音であることが前提です。ここに言うレベルとは、演奏のことではありません。録音の質のことです。

もの凄くお金をかけて高級なマイクとミキサーとレコーダーで録音しなければいけないということではありません。例えばスマホで録音するにしても、どんなソフトで録音するか。せめてスマホに挿せるマイクをつけてみるのはどうか。など、それほどお金をかけなくてもできる些細な録音に対する気遣いがもっと多くの皆さんにあると良かったなと思いました。

審査するにあたって、例えばリミッター(音が割れてしまわないように録音機、或いはソフト的にボリュームを操作するような機構)をかけたまま録音すると、途中で音が大きくなったり小さくなったりするので、集中して聴くことができません。また、マイクと奏者の位置が近すぎたり遠すぎたりすると、やけに指や息による雑音が多かったり、逆にタンギングや音程の良し悪しが全くわからなかったり…

僕達には一応自分の中で審査の基準があるのですが、それに当て嵌める前の段階でつまづいてしまった事が今回は多々ありました。

自分の大学時代の恩師の一人で、ある音大で学部長に

までなられた作曲家の方がいらっしゃいます。以前彼と話していた時に、彼はちょうどその頃、とある有名な助成金の審査員をなさっていて、その審査の時のことを話してくれた事があります。

「まずは良い音で録音されてないと、数小節で再生を止められちゃう。皆んな聴く気がなくなっちゃうんだよね」と言っておられました。

もちろん、今回のコンテストで途中で再生が止められたことは一度もありませんでしたが、その先生が仰っていたことが何度も頭をよぎった事も事実です。正直言うと、何だか分からないまま終わってしまい、講評を書くのに大変苦勞した録音もありました。

そんな事もあって、今回のこのリコ研便りに原稿を書くにあたって、正直今年に関しては印象に残っている演奏がないと言うのが本音です。

これは応募してくださった皆さんだけのせいではなく、それなりの再生装置のある会場を確保できなかったこちら側にも責任はあるのかもしれませんが。

しかしながら、これから先コロナの影響がどれくらい長引くかわからない中、その間またリモートでの審査が行われる可能性があるとしたら、その部分はお互いに改善して行かなければいけない大きな課題であると言えるのではないのでしょうか。

お金をかける事ができない学校や団体もちろんあるでしょう。でも、先にも書きましたが今はスマホに挿せる安いマイクでも、そこそちゃんとした録音ができたりしますし、そのマイクと良質な無料アプリを組み合わせれば、下手な録音機材よりもいい音で録音できたりする場合があります。(事実、僕もリハーサルを録音したりするにはその組み合わせを使う事もあります)コンテストにかける情熱は皆さん凄いのがあると思いますし、それをほんの少しだけそちらに注いでいただければお互いにいい結果を得る事ができると思います。(例えば自分たちの演奏が上手いかなかったとしても僕達は今回よりいいアドバイスを送れると思うので…)

今回はあえて演奏に触れませんでした。そこは他の審査員の先生方が書いてくださると思いますので、でも、自分は来年、また再来年と皆さんの演奏をいい状態で聴けることを楽しみにしていますので、もちろんライブで聴ける事が一番ですが、リモートでの開催になってしまったとしても、今年よりも良い状態の録音が沢山届く事を心からお待ちしています!



「演奏できる瞬間を大切に」

上野学園大学講師
リコーダー奏者

浅井 愛

第42回全日本リコーダーコンクールは無観客、非公開、録音音源審査で開催され、私は小学生の部、一般の部を審査しました。昨年に引き続き、コロナ禍で練習時間の確保や準備で苦勞した団体があったと聞き及んでいます。そのような状況下において、参加した皆さんの熱意ある演奏は、録音音源を通じて、私たち審査員にしっかりと伝わってきました。

N. シェドゥヴィル「忠実な羊飼ひ」を演奏した、北海道：北広島エアリードットの北野暖奈さん。のびやかで透き通った音色に魅了されました。アーティキュレーションの多彩さ、カデンツや繰り返し後のディミニュションも見事でした。また、梁邦彦、編・金子健治「十二国記」を演奏した、北海道：帯広市立広陽小学校の皆さん。難しい調性の作品ながら音程が素晴らしく、各楽章の曲想をよく理解した演奏でした。

一般の部では、E. クレーマー、編・M. ペトリ「華麗なる変奏曲 op. 18」を演奏した大阪府：川口紗承さん。息の安定感と

タンギングのコントロールが抜群でした。場面ごとの音色の変化も素晴らしかったです。重奏の部では、J. オケゲム他「ミサ曲」を演奏した、東京都：小作ばれいしょアンサンブルの皆さん。毎年、積極的にルネサンスやバロックの作品を演奏していると思います。音楽作りが丁寧で、演奏の随所に工夫がみられ、難易度の高い作品をよくまとめて演奏していました。そして合奏では、S. ジーク「アフリカ組曲17番」を演奏した、北海道：RECつべつの皆さん。重厚な響きの中、難しいリズムを軽やかに表情豊かに、そして楽しげに演奏していました。その他、ここではご紹介しきれませんでした。参加くださったお一人おひとりに拍手を送りたいです。そして、コンクールを支えてくださった関係者の皆様に感謝申し上げます。

皆さんにとって新型コロナウィルス感染症拡大防止のガイドラインを守りながらの活動は精神的にも体力的にも疲れてしまうことがあったことでしょう。中には参加を断念した団体もあったかもしれません。私自身も演奏会の中止が続き、先の見えない状況に不安もありますが、仲間と演奏できた時間は何とも言えない感動があります。やっぱりリコーダー・アンサンブルは楽しいですね。皆さんもコロナ禍だからこそ、仲間と演奏できる瞬間を大切にしてほしいです。次回は直接、皆さんの演奏を聴くことが出来ますように。心から願っています。



リコーダー奏者

森 吉 京 子

自由な活動が制限される日常の中で、このコンテストの開催の重みを感じる回となりました。開催をオーガナイズされた先生方の日頃のご努力はもちろんのこと、児童、生徒の皆さんの活動の原動力となっている「音楽を共に奏でる喜び」を絶やさず励まし続けて下っている先生方の日々のご努力は相当なものと思います。審査員を務めさせて頂く私たちの多くが、このコンテストには強い思いがあります。このような日常であるからこそ、たとえ形は違ってもコンテストの開催を心から嬉しく思い、深い感謝の気持ちでいっぱいです。

すべてが録音審査という異例の形式になりましたが、驚きを持って気づかされたことがあります。それは、たとえ環境が異なる状況で録音された演奏であっても、すべてが「ちゃんと聞こえてくる」ということでした。通常であれば、同じステージでほぼ同様に整えられた音響の中でのライブ演奏を審査するのですが、今回は録音。録音する場所も時間も様々な条件が異なることを、審査する私たちが常に念頭に置かなくてはなりません。それらの条件の違いをぬぐい切って音楽そのものを聞き取ることが出来るかどうか、という不安がありました。ところが、1曲、2曲…と聞き進めるうちに、先生方のご指導が

どのようなものであったか、演奏する児童・生徒たちがどのように音楽に向き合っているか、技術的にはどうか、問題なく受け止めることが出来ました。当然、録音条件の違いは聞こえてくる音質や音量バランスに影響を与えています。けれども、もっと奥から聞こえてくる「音楽」は明瞭に聞こえてくるのです。このような形式の審査は今後一切ないとも言い切ることが出来ない。昨今、「継続は力」という言葉を今こそ心の底から信じて、「音楽を共に奏でる喜び」を続けていくことが最優先と、審査中に何度も何度も思いました。

演奏を聞きながら、リコーダーという楽器について改めて考えることがありました。「リコーダーでは、実際に出てくる音とやっていることが真逆なんだよね。」と、オランダのリコーダー奏者が日本でマスタークラスをした際につぶやくように発した言葉を思い出していました。例えば、アルト、テナー・リコーダーがスタカートで刻むリズムを奏でる時、主旋律をサポートするように「軽く」アーティキュレーションすることになります。ところが、リコーダーはむやみに軽く吹いてしまうと音程が下がってしまったり全体の和音に影響してしまいます。「軽く」刻むリズムをアーティキュレーションする時は、舌の動きを極めて素早くし、息圧を適度に保つ必要があります。また、ソプラノ・リコーダーに大切な主旋律がありそこにスラーが部分的に付けられている時はどうでしょう。指の動きは出来るだけ素早く、息圧を一定に保ち続ける必要があります。すべてのことを「素早く」、そして「継続して」いかなくはなりません。一方で、少しずつクレシェンドをしていきクライマックスで全パートがきれいに重なった

最大音量の和音を響かせたい時はどうでしょう。咽頭の奥と舌の奥に空間を保ち、喉に力を入れず「力みからは一切が開放された状態で」吹くことが理想です。

軽く・柔らかく吹きたい時には舌も指もきびきびと動かし、横隔膜の動きを支える筋肉の力を感じる必要があり、その結果聞えてくるのが「軽やかなスタッカート」や、「伸びやかで柔らかいメロディの響き」なのです。また、喉や上半身の力みを

無くし楽な状態に身体を保たずして、フォルティッシモの美しい和音を響かせることは出来ないのです。「軽く吹いて」、「やわらかく吹きましょう」、「ここは大きく力強い音で吹いて!」という指導の際の言葉遣いが慎重に選択される必要があると、私自身もリコーダー・アンサンブルを指導する日常の中で感じています。



録音審査の演奏音源を顧みて

リコーダー奏者

吉澤 徹

過日、本選に出場する団体すべての音源を集めた非公開の第42回コンテスト以来、久方ぶりに皆さんの演奏を同じテープの形で通して聴きました。

去年の3月28日、コロナ禍によりこのような形での録音審査とはいえ、不器用な私は当日、従来の対面での審査と同じようなメンタルでスピーカーに向かい、せっせとコメントを書き続けていた記憶があります。いわばクローズな環境・タイトな時間の流れの中で、初対面の音源と対峙するのと違い、再びの今回は在宅で、多少のコメントを書き込んだ当日のプログラムを手に、時間を気にせず(聴き直しや中断もありで)少しのんびりと楽しみながら聞いてみると、色々と感じることもありました。

通して1回だけ聴く当日と違い、ゆっくりチェックしながらの聴き返して感じた、皆さんの音源に共通する技術的なウィークポイントを挙げておきます。

1. 声部毎のテンポが揃わず、メロディー声部のテンポが走る傾向が強い。
2. アインザッツ(メロディーの振り出し)が揃わない、若しくは出し手が仲間にはなくて、目の前の譜面に向かって出している様な演奏が多い(対面ではあまり無かったかな～)
3. メロディーの中での小さな強弱、抑揚に乏しく、押し込んで吹く傾向が強い。
4. 休符や、切り返しの「間」が一本調子で、音楽の表情に寄与していない。

対面でライブな演奏を聴くのと違い、皆さんにはこの音源を提出するまでに幾度もテイクを重ねる機会もあったでしょう。少し前、対面と録音の混成で臨んだ回もあり、正直その経験値から今回の録音クオリティーそのものも大変上達し、録音技術の優劣で採点が変わるリスクもとても少なくなっていたと思います。ですから素材として上記1は特に、2に関してもそれこそ聴き直して十分にそのマイナス面に気づき、リテイクで対応のできることを思います。

このようなメリットの反面、ビジュアルで訴えかける機会を失い、人と人が対峙する空気感のようなもので何かを訴え、それを私たち聴き手が受け取ると云ったコミュニケーションが取れないテープメディアでの審査により、私たちの審査コメントを見て「判ってもらえないかなあ」と言う思いをされたところも少なくは無かったでしょう。

現況下、まだまだコロナの流行で、今年度本選出場のグループは録音審査となりますね。ノウハウと言うことではなく、上記3や4に留意し、メロディーに景色を乗せることを心に意識して、皆でアンサンブルをして、ミスをするリスクが増えたとしても録り直しが可能なので、うまく録れたらそこに自分たちの気持ちたちが充分伝わるような音になるよう、そんな形でのチャレンジをしてもらえたらいいなと思います。

一例ですが、Andante 四分音符でド↑ミ↓ドを吹くとしましょう：

A: 入口のド、と最後のド、どちらがよりみっしりした音にしたいですか？(音の体幹の太さを変えてみる＝結果として音量に微妙な差が出て、陰影感が得られる)

B: ミに上がる時、音が上に向かい成長するようにしたいですか、ミはドの音のファミリー(ハ長調)の主役でない一員として繋げたいですか(音の関連性を考える＝結果として微妙なクレシェンド／ディクレシェンドがつく)

C: 3つの音をただ連続して吹くのか、例えば、ド↑ミ↓○ドの様に最後の音を少し離して吹くなど、その離している○のときみんなはどんな気分でののか？

A.Bを考えることにより、どんなタンギングで吹くとイメージになるのか、どのくらい息を集めると体幹の太い音に聞こえるのか、タンギング直後にスーッと軽くなるのか、息を増やし音を伸ばすのか、皆さんのアイデア次第で可能性は無限に広がります。Cを考えると、小さなセンテンスが、メロディー全体の中でどんな要素になると素敵なのかな？と考えるきっかけになると思います。(勿論全員が一つの意思のもと、完璧に吹くには少しだけテイク＝録音回数、が増えるかも、ですけど)

経験上、小さなメロディーの一箇所でも思い通りになってそれを聴き返した時の喜びは格別だし、そうすると、ここも、あそこも、とどんどんアイデアが湧いてくると思います。

さあ、皆さんの録音の音だけで素敵な風景を描き、私達審査員の耳を奪い、鉛筆をしばし止めてみようではありませんか！

第45回全日本リコーダー教育研究会 全国研究大会「横浜大会」開催報告

全日本リコーダー教育研究会会長・横浜市立桜岡小学校校長 後藤 俊哉

＜研究主題＞リコーダーの音色や響きを生かした様々な授業のあり方

本来ならば2021(令和3)年1月15日に開催される予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大のため延期となり、2021(令和3)年7月2日に開催することができました。

横浜市は昭和40(1965)年半ばからアルト・リコーダーを5年生から、ソプラノ・リコーダーを2年生から導入しており、さらに中学校とのつながりを大切にするため平成21(2009)年3月には、「横浜版学習指導要領音楽科編」として小中一貫カリキュラムを作成し、現在に至っております。

今回は小・中学部それぞれの授業を、一人の教諭が授業を行うという、小中一貫校ならではの取組を見ていただく絶好の機会となりました。とはいえ、未だ感染状況が落ち着かない時期の開催となり、県外からの参加が望めない状況になっておりました。そこでYouTube配信を後日行うことで、合わせて150名を超す参加を得ることができました。

会 場：横浜市立義務教育学校 西金沢学園 授業者：吉岡 美咲 教諭

1.公開授業1(6年生)ソプラノやアルト・リコーダーを用いた授業

学習の主題…「全体の響きを聴き、音を合わせて演奏しよう」
中心教材…サウンドオブミュージック

ソプラノ・リコーダー1・2パートとアルト・リコーダーの3声部の編成の楽譜を作成し、授業を行いました。

本時では、主な旋律が低音域であるため引き立てにくくなっているウと音楽の縦と横の関係を捉えて演奏する必要があるエのユニゾンを中心に取り組みました。パートの役割を生かし、主な旋律と和音のパートをどのように工夫して演奏するとバランスがよくなり、音を合わせて演奏することができるか、ユニゾンを生かして演奏するためにはどのような工夫をするとよいかについて考えました。和音のバランスを確かめたり、主な旋律をよく聴くようにしたり、パートの人数を工夫したり、階名唱や速さを遅くして演奏したりと様々な方法を考え、それを音で確かめ、試行錯誤していきました。このような学習活動を通して、一人ひとりがパートの役割を生かして演奏し、全体の響きの調和を大切にして音を合わせることができてきました。



2.公開授業2(8年生)(中学校2年生)アルト・リコーダーの授業

学習の主題…曲にふさわしい表現を創意工夫して演奏しよう
中心教材…春(「和声と創意の試み」第1集「四季」から)

アルト・リコーダーのために編曲された本教材は、ソネットの「春がやってきた」の部分にあたる。A-A'-B-B'と、同じような旋律を繰り返す構成です。2つのパートはほとんど同じリズムで3度の音程で重なります。曲の特徴と感じ取ったことを生かし、どのようなアーティキュレーションで演奏するかによって曲の雰囲気の変化が捉えやすいと考えました。

曲中のアーティキュレーションを工夫する学習を通して、グループで創意工夫をこらし、曲想を豊かに表現することができました。



3.演奏会

リコーダー奏者 吉澤 実氏
リュート奏者 永田 平八氏

参加者や会場校の希望する児童を対象に、演奏会が行われました。「グリーン・スリーヴス」「小鳥愛好家の楽しみ」「アメイジング・グレイス」など、全10曲を披露。子ども達や参加者は素晴らしい演奏にみな聴き入っておりました。



4.研究協議会

文部科学省教科調査官 志民一成先生、国立音楽大学教授 津田正之先生、横浜市教育委員会指導主事 古田彩乃先生、横浜市立都田小学校長 今村行道先生の指導及び講評があり、成果と課題を明らかにした上で、よさを価値付けしていただきました。

改めてリコーダーの教育的価値を実感した次第です。充実した大会となりました。



結びになりますが、文部科学省、文化庁、神奈川県教育委員会、横浜市教育委員会、横浜市小学校及び中学校音楽教育研究会等多くの関係機関のご理解・ご支援のもと、授業校である横浜市立義務教育学校西金沢学園 増田昌浩校長をはじめとする教職員の皆様、授業者の吉岡美咲先生に感謝申し上げます。

会員の皆様には今後とも本教育研究会へご理解・ご協力をお願い致しますとともに、各都道府県のリコーダー教育研究会のますますのご発展を祈念します。

次回、第46回 全日本リコーダー教育研究会 全国研究大会【北見大会】の盛会を祈念しております。

次回予告

第46回 全日本リコーダー教育研究会全国大会「北海道・オホーツク北見大会」のご案内

- 日 時 令和4年11月22日(火)13時受付 13時30分開始
- 会 場 公開授業：北見市立小泉小学校(体育館を予定)
全体会議：北見市芸術文化ホール

詳細はJRSホームページに掲載致します。

全日本リコーダー教育研究会役員名簿

役職名	氏 名	担 当	所属先(令和元年9月30日現在)	役職名	氏 名	所属先(令和元年9月30日現在)
会 長	後 藤 俊 哉		横浜市立桜岡小学校	名 誉 会 長	初代 花 村 大 二代 徳 山 博 良 三代 中 澤 正 人 四代 親 泊 明 美	故人 故人 板橋区文化・国際交流財団 沖縄県リコーダー教育研究会
副 会 長	小山内 仁 根 津 江 美子 富 山 和 幸 上江洲 学	財 務 統 括 広 報 統 括 事 業 ・ 研 究 統 括 研 究	北海道教育庁宗谷教育局 十日町市立上野小学校 川越市立霞ヶ関小学校 与那原町立与那原小学校	顧 問	三 木 貞 夫 影 山 建 樹 橋 本 勤 也 越 智 健 一 皆 川 朗 森 昌 雄 日 置 嘉 雄 置 美 知 代	元大阪市公立中学校 元静岡県公立中学校 元高知県公立小学校 元東京都公立小学校 元新潟県公立小学校 元新潟県公立小学校 元三重県公立小学校
本 部 役 員	井 戸 正 利 大 吉 幸 子 長谷川 紘 子 漆 畑 美 之 嶋 見 靖 之 金 秀 賢	事 務 局 長 兼 任 東京担当役員兼任 事務局次長兼任 新潟担当役員兼任 大阪担当役員兼任	東京リコーダー教育研究会 石狩市立厚田学園(前期課程) 立川市立第四小学校 川崎市立三田小学校 佐渡市立両津中学校 大阪リコーダー教育研究会		原 田 彰 仲 本 朝 昭 小 池 純 夫 小 原 惇	元鳥取県公立中学校(故人) 元沖縄県公立中学校(故人) 元新潟県公立小学校(故人) 元新潟県公立中学校(故人)
地区担当役員	三 笠 裕 也 嶋 見 靖 之 管 圭 隆 小 形 隆 子 長谷川 紘 枝 官 史 枝 鈴 木 光 乃 山下 照 乃 長 岡 む つ み 金 秀 賢 子 松 本 聖 子 宮 永 智 洋 子 高江洲 博	北 海 道 担 当 新 潟 担 当 栃 木 担 当 茨 城 担 当 東 京 担 当 長 野 担 当 静 岡 (静 岡 地 区) 担 当 静 岡 (浜 松 地 区) 担 当 三 重 担 当 大 阪 ・ 韓 国 担 当 宮 崎 担 当 鹿 児 島 担 当 沖 縄 担 当	北斗市立大野中学校 佐渡市立両津中学校 足利市立東山小学校 古河市立下辺見小学校 立川市立第四小学校 長野市立清野小学校 静岡リコーダー教育研究会 静岡リコーダー教育研究会 鈴鹿市立桜島小学校 大阪リコーダー教育研究会 宮崎市立穂中学校 さつま町立宮之城中学校 沖縄県リコーダー教育研究会	名 誉 会 員	玉 利 敬 三 郎 門 野 フ ミ 太 田 正 明 花 岡 澄 夫 砂 八 徹 夫 橋 本 健 一 近 藤 誠 二 中 島 聰 南 雲 照 諸 岡 忠 正 神 村 治 毅	(東 京) (鹿 児 島) (長 野) (長 野) (沖 縄) (鳥 取) (東 京) (北 海 道) (故 人) (故 人) (故 人) (故 人) (故 人)
事 務 局 長	井 戸 正 利		東京リコーダー教育研究会	相 談 役	吉 澤 実 上 杉 紅 本 村 睦 大 村 幸 金 子 治 吉 澤 尚 北 村 健 北 山 俊 彦	
事 務 局 次 長	牛 田 恵 美 漆 畑 友 美	庶 務 ・ コ ン テ ン ト 事 務 局 担 当 財 務 ・ 会 計 担 当	東京リコーダー教育研究会 川崎市立三田小学校			
監 事	馬 場 喜 久 雄 山 田 明 彦 高 麗 秀 純	ホ ー ム ペ ー ジ 管 理 担 当	竹早学園竹早教員保育士養成所 一般企業 一般企業			

(令和2年10月1日~令和5年9月30日)



編集後記

ここにリコ研だより第8号を発行する。第41回全日本リコーダーコンテスト(令和2年3月29日)が新型コロナウイルス感染拡大のため中止となり、2年ぶりの発行となる。今回も第42回コンテスト(録音審査)審査員より御寄稿いただいたことを心から感謝申し上げる。

永らく、本会の役員としてご尽力いただいた小原惇先生(新潟県、昨年2月末、享年86歳)、中村毅先生(新潟県、昨年10月)が相次いで亡くなられた。ご生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表する。

さて、本会は1972年(昭和47年)11月25日に創立しました。昭和53年に開催した第7回全国大会(東京大会)の大会紀要挨拶文に、大会実行委員長であった故徳山博良先生は「思えば恵那の山麓で、田中吉徳先生の“生活化を目ざすリコーダーアンサンブルの指導”をテーマとした研究授業から出発した研究会(中津川大会)」と記している。今年で半世紀である50周年を迎える。

コロナ禍ではあるが節目を記念して「創立50周年記念事業」を企画する予定である。詳細は後日、乞うご期待。

「僕たちは今、地球規模の病気にかかっている最中で

あり、パンデミックが僕らの文明をレントゲンにかけているところだ。数々の真実が浮かび上がりつつあるが、そのいずれも流行の終焉とともに消えてなくなることだろう。もしも、僕らが今すぐそれを記憶に留めぬ限りは。」(「コロナ時代の僕ら」イタリアの物理学者で作家のパオロ・ジョルダノ著)

コロナ禍は、偶発的な出来事ではなく、必然的な感染症の流行と捉えるべきである。このような感染症は、規模や形を変え、歴史上繰り返されてきた。当然、今後も、人知を超えた形で、再び起こり得ると考えられる。

パオロ・ジョルダノ氏が最も恐れていることは、「コロナが終息し、日常生活が戻ってくることによって、歴史的感染症の流行を人々が少しずつ忘れていくこと」であると指摘しているのである。「コロナウイルスはどこから来て、人類に何を伝えようとしているのか」と、語っているのである。確固とした正解のない問いに直面する日々、今までの当たり前や常識が通用しない時代を乗り越えるためには、これまでにない型破りな発想が解決の突破口になるのではないのだろうか？リコーダー教育の未来はここから始まる。

入会のお知らせ

本会への入会手続きは随時受け付けております。一緒にリコーダーの花を咲かせましょう！

共に学び、共に成長するリコーダー愛好家の皆さんの入会を心よりお待ちしております。

本会の会員は次のとおりとする。

- (1)正 会 員 リコーダーを愛好する個人で別に定める会費を納める者
 - (2)研究会会員 各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会で別に定める会費を納める団体
 - (3)会 員 本研究会が開催する全国研究大会及びコンテストで参加資格及び出場資格を得た個人及び団体で各事業の申し込みにおいて別に定める会費を納める者
 - (4)維持会員 本研究会の目的に賛同し、別に定める会費を納める者及び団体
 - (5)名誉会員 本会に対し特に功労のあった者のうちから、総会の議決をもって推薦された者。
- (名誉会長、顧問、参与、名誉会員及び相談役の名称で

名簿に記載する。)

会費は、年会費として徴収する。

(1)正会員一人＝ 3,000円

(ただし研究会会員で登録した者は免除)

(2)会員一団体＝ 3,000円

(3)研究会会員一研究会＝ 10,000円

※研究会会員とは、各都道府県を単位としたリコーダー教育研究会をもって組織し、構成員を5名以上有し、本研究会に会員名簿と、会則を提出できる団体で本研究会が承認した研究会を指す。

※研究会会員に所属し、会員名簿に掲載されている者は正会員と同様の扱いとする。

(4)会費の納入は、毎年2月末日までに納入すること。

(納入方法は別途定める。)

申し込み先 _____

〒350-1175 埼玉県川越市笠幡177

川越市立霞ヶ関小学校内

全日本リコーダー教育研究会 副会長 富山 和幸

TEL:049-231-1303 (できるだけメールにてお問い合わせください)

Mail:zen.rikoken@gmail.com HP:http://www.zenrikoken.com/